法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-09

文化の定義のための覚書 : 文化その1

EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 : journal of intercultural communication : ibunka
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
112
(終了ページ / End Page)
123
(発行年 / Year)
2003-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002109

Hosei University Repository

文化の定義のための覚書①
－文化その１－

江　村　裕　文

本稿では「文化の定義」をテーマにしてみたいと考えているのだが、井筒俊彦は以下のように「文化」については「定義」しない方がよいと書いている。

「文化とは、そもそもどのようなものであるのか。といっても、私はここで、ことさらに「文化」を定義しようと思っているわけではない。世の中には、特に人間的経験の事象の場合、それを学問的あるいは哲学的考察の対象として取り上げる時、うまく定義できないもの、定義しないでおいたほうがかえっていいものがたくさんある。数学の記号組織のようなメタ言語の場合には、使用する辞項を初めにきっちり定義してかからなければ、どうにも動きようがないが、自然言語で、わけても抽象概念を取り扱う場合など、語の定義を無視して議論を始めたほうが、ずっとわかりやすくなることが多い。定義的に問題にしなければ、誰にもよくわかっている。無理に定義しようとすると、わけがわからなくなる。アウグスティヌスの時間論がその古典的実例である。「文化」もそういうものだ、と私は思う。」

井筒氏にこのように言われては、以下になんとか「文化」の「定義」について、結果的にはとりとめのないものになってしまうとしても、一応まとまったことを、書こうと意気込んでいる私にとっては、最初からその意欲を挫かれ、削がれているわけだが、それだからこそ、この無謀とでも言うべきテーマに取り組む意味もあろうというものである。

「文化」の定義といった途端に、直ちにいくつかの問題に直面する、というかいくつかの課題をクリアーする必要が出てくる。

ただしそのいくつかの問題のうちの一つ、つまりここでは「文化」についてすでに日本語で語りはじめているわけだが、そのことの一部である日

Hosei University Repository

本語における「文化」のいわば意味の歴史といったことには最初から触れないことにするといっておきたい。例えば「文化文政」の時代といったときの「文化」の意味についてとか、これから語ろうとしている「文化」という単語がどのようにしてその意味を獲得し、その意味で語られるようになったか、等の問題については扱わないということにしておきたい。②

さて、今述べたことと無関係ではないのだが、一つの問題は、「文化」の、と書いた途端にすでに足を踏み込んでしまっていることだが、日本語で語り始めているということが原因で起こるはずの問題である。

例えば、世界の「酒」について語ることは可能だろうか。その答えは二つある。一つは不可能だという判断。何故ならば「酒」は日本のある種のアルコール飲料の名称であり、「酒」について語ることは日本のそのある種の（「酒」と呼ばれる）アルコール飲料について語ることしか意味しないと考える場合。もう一つは可能だという判断。別に日本独特のものに限らず、世界中に見られるいわば「アルコール飲料」として括れるものをすべて対象にして、その集合全体に日本語の「酒」というラベルを仮に張りつけるということは可能だと考えるならば、世界の「酒」について「日本語で」語ることは可能であるとも判断できることになる。

この「二重性」は、何かを対象にして何語かで語り始めた途端にいつもつきまとう問題でもある。この問題をクリアーするために、ここではローカルな対象を「三角括弧」でかこみ、そのローカルな対象の名称をいわばユニバーサルに使用するときには「二重三角括弧」でかこむということでこの「二重性」の問題を棚上げにしておきたいと思う。例えば、〈酒〉は日本の米でつくった（日本のという意味でローカルな）アルコール飲料のことだが、《酒》は世界に見られる「酒」に類した（つまり原料が米に限らない）アルコール飲料のことだというふうにするわけである。

そうすることによって、例えば〈シャーマニズム〉はシベリアのある民族に見られる宗教的風習の一種だが、《シャーマニズム》は世界に見られる、そのシベリアのある民族に見られる宗教的風習によく似た宗教的風習を総称した名称として使えることになる。同様に〈着物〉は日本の和服を指すが、《着物》はいわば世界中の人々が身にまとっている布製のもの一般を指すことができる。ただしここでは服という単語が日本語にあるので、「着物」は日本の〈服〉を、服は世界中の人々の《服》を表すこともできるのだが。

Hosei University Repository

今もう一つは、いわば「定義」の定義、つまり「定義」とは何かという問題である。最初に荒っぽく議論をしておくならば、「定義」というのは、「定義」しようとする対象についての内容の記述（複数）つまり置き換え（複数）、あるいは意味（複数）のうち、特にその視点が他の観点より格段優れていると何かによって判断されるわけではないけれども他の観点より何らかの点で優れていると勝手に決めた、そのある観点から見て一番ふさわしい記述、置き換えのことであると一応いうことができるだろう。

と一応「定義」の定義をしたつもりになっているが、まず量の点から見ても、これでは何ら決定的なことは言っていない。ある観点から見て一番ふさわしいとしても、一語を他の一語に置き換えれば、それが定義なのか、それとも一語を数語、あるいは数行にわたる言説に置き換えることができれば、それで定義なのか、あるいはその一語を数万ページにわたる解説に置き換えることができれば、それでも定義なのか。

というわけで、「文化」についての定義は、ここで日本語でおこなおうとしているのだが、これまで述べてきたようないくつかの問題点を考慮しておかないと、語りだした途端に対象が手の中からヌルリと逃げだしてしまうように、どんどん「文化」の話から逸れていってしまう危険性をはらんでいる。そう考えると、その定義に向かう最初の一歩すらもなかなか踏み出せないことになってしまい、定義からは外れた定義である同語反復、つまり「文化」というのは「文化」なんですよという記述や置き換えをしたくなる。記述した途端に、別の何かに置き換えた途端に、厳密に言えばその記述なり置き換えはもとの対象とはずれたものでしかあり得ないわけで、「文化」っていうのは「文化」のことですよというのがある意味では完全な定義なのだが、別の意味では定義ですらないことも明らかである。

「文化」を同語反復ではなく、別の表現に記述したり置き換えたりする例は、すでに古くは、主に大航海時代以降に未知の地域に出掛けてゆき、そこから泥棒同然に様々な物を持ちかえり、一般に「博物館」とか「美術館」と呼ばれる盗品展示場にならべてその盗品の詳しいカタログを作成したヨーロッパの諸帝国の展示品カタログに見られるのが代表的である。また、それらの記述や置き換えの一部は、例えば文化人類学者の手による「文化」に関する論文や著書の中に見られるものであるが、私の手元にはある時点までのそういった様々な学者たちの「文化」の定義の実例ばかりを

Hosei University Repository

集めた便利な本があるので紹介したい。その著者というか編者というか、はA.L.KroeberとC.Kluckhohnである。タイトルは「Culture : a critical review of concepts and definitions」で、1952年発行の本である。この本の中で具体的にどんな定義がなされているかについては実際にこの本を見ていただくことにして、簡単にまとめると、彼らはこの本の「Part Ⅱ」において「Definitions」をあげているが、それは以下のように「Definitions」を大きく7つのグループに分け、それぞれについて諸学者の説をあげている。その実際の数はそれぞれAが20、Bが22、Cが25、Dが38、Eが9、Fが40、Gが7で、合計161の定義がここでは集められていることになる。

Definitions

A : Enumeratively descriptive	20
B : Historical	22
C : Normative	25
D : Psychological	38
E : Structural	9
F : Genetic	40
G : Incomplete Definitions	7

さらに彼らはこの本の「Part Ⅲ」において、「Some Statements about Culture」をあげているが、それは以下のように「Statements」を大きく6つのグループに分け、それぞれについて諸学者の説をあげている。その実際の数はそれぞれAが22、Bが7、Cが9、Dが22、Eが17、Fが23で、合計100の説明がここでは集められていることになる。

Statements

A : The Nature of Culture	22
B : The Components of Culture	7
C : Distinctive Properties of Culture	9
D : Culture and Psychology	22
E : Culture and Language	17
F : Relation of Culture to Society, Individuals, Environment, and Artifacts	23

以上の彼らの本だけでも、文化について「Definitions」と「Statements」を合わせると、261の「定義」らしき言説が認められるわけである。

以下では以上の他に、私の手元にある何冊かの本の中で、「文化」について触れているものを紹介しておきたいが、そのどれを見ても必ずといっていいほどあげているのが、1871年のタイラーの定義である。

「文化・・・とは、知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、社会の成員としての人間が獲得した、あらゆる能力や習慣の複合的全体である。」

Hosei University Repository

このタイラーの定義を嚆矢として様々な「文化」に関する言説が存在するわけである。

蒲生正男と祖父江孝男の編による1969年の『文化人類学』では、多くの定義のうち「最も適切と思われるものの一つ」として、次のクラックホーンによる定義を紹介している。

「文化とは、後天的・歴史的に形成された、外面的および内面的な生活様式の体系であり、集団の全員または特定メンバーにより共有されるものである。」

また、例えば、F.K.ボックは、1974年の『現代文化人類学入門』の中で以下のように書いている。

「簡単にいうと、「文化」は、ある人間集団の成員の行動に影響を及ぼす期待、了解、信仰、あるいは同意のすべてを含む。これらの共有観念は、意識的なものであるとは限らないが、つねに社会的学習によって伝達されるものであり、それらはあらゆる人間社会が当面する適応上の諸問題に対して、ひと組みの解決法となっているものである。」

井筒俊彦も、

「「文化」という語は、定義しないで使えば、かえって、なんとなく意味がわかるのだ。」

と言っていながら、1985年の『意味の深みへ』では、

「仮に、「文化」とは、ある人間共同体の成員が共有する、行動・感情・認識・思考の基本的諸パターンの有機的なシステムである、と考えておくことにしよう。」

と書いており、さらに、

「以上のように考えた場合、先ず目につくことは、文化の規制力である。一つの共同体に属する人々の一人一人の欲望、価値観、行動の動機づけ、ものの見方、ものの考え方、感じ方をその共同体の文化は強力に縛る。この意味での文化は、すなわち、文化基準なのであって、その資格においてそれは共同体の生活様式、実存形態を根本的に規定する。」

と、文化の規制力について述べている。

E.ホールも彼の一連の著作の中で文化の定義らしきものを提示している。

1959年の『沈黙のことば』では、

「人類学者にとって、文化とは一個の人間集団の生き方、すなわちかれ

Hosei University Repository

が身につけた行動の型や態度や、物質的なものの全体を意味してきた。この一般的な見方では一致しているが、文化の実体がなんであるかということについては、人類学者の意見は必ずしも一致していない。」

それに付け加えて、

「各分野の第一線にいる真面目な人びとでも、文化がどれほど人間の行動に深い永続的な影響をあたえるものであるかを見逃している。しかも文化による決定的な影響のほとんどは、人間の意識の外にあり、個人がどれほど意識的に操作しようとしても、できない相談なのである。」

と述べているし、1966年の『かくれた次元』には、文化そのものに関する記述はないが、

「異なる文化に属する人々は、ちがう言語をしゃべるだけでなく、おそらくもっと重要なことには、ちがう感覚世界に住んでいる。」

「人間は文化を発達させるとともに、自分自身を家畜化した。」

といった文化に関する記述があり、1976年の『文化を越えて』では、

「文化についての以下の三つの特徴については人類学者のあいだでは、ほぼ意見が一致している。つまり、文化は生得的なものではなく、学習されたものであること、また文化の種々の面は、相互に関係し合っていること――つまり、文化のある面に触れれば、文化の他のすべての面がそれに影響されるということ、そして文化は一つの集団に共通しており、その結果、異なる諸集団を区別していること、の三つである。」

と述べ、また、

「文化は人間にとって、一つの媒体である。そして人間の生活は、すべての面で文化とかかわり合い、また文化によって変容されている。いかに人々は自己を表現するか（情緒表現を含めて）、いかに彼らは考えるか、いかに彼らは行動するか、いかに問題を解決するか、いかに都市を設計し、レイアウトするか、いかに交通体系が機能し、そして組織されるか、経済体制及び支配体制がいかに構成され機能するか、といった面について、文化は作用しているのである。」

と述べている。また1983年の『文化としての時間』では、

「文化は少なくとも三つの異なるレベルで機能していることがわかる。(1)ことばと、特別なシンボルが目立った役割を演ずる意識的、技術的なレベル。(2)選ばれた少数者だけに示され、局外者は拒否される、スクリーン

Hosei University Repository

によって遮断された、私的なレベル。(3)基層文化の、下層にあり、意識されない暗黙のレベル。言語は前二者のレベルでは目立った役割を演ずるが、第三のレベルでは二次的な役割しか演じない。これは基層文化が完全に非言語的であるということではなく、規制がまだことばでは明確に系統立って表現されていないということにすぎない。その結果、表面ではまったく似ているように見える多くの文化が、綿密に調査してみると非常に異なっていることがしばしばある。」

と述べている。

プロッサーは1978年の『異文化とコミュニケーション』の中で、

「文化の定義には際限がない。」

としながらも、

「文化には言語パターン・価値観・態度・信念・習慣・思考体系といったものを伝承するという側面がある。文化というものにはまたある社会集団内のメンバーに対してのみならず、そのグループが影響を及ぼしたいと思う外部の人々に対しても規制を加える力が内在するということが重要な特徴だ」

と述べ、また、

「人間の社会的コミュニケーションがシンボルと道具を形成・駆使・操作する人間の能力にかかっているという考え方が、文化の定義の中心概念である。」

と述べている。

サモーバー等は、1981年の『異文化間コミュニケーション入門』の中で、

「正確に言えば、文化は、何世代にもわたる個人や集団の努力によって多くの人々により受け継がれた知識、経験、信念、価値観、態度、意味、階級、時間の観念、役割分担、空間の使い方、世界観、物質的な財産などすべて包含したものである。」

と述べている。

これと似ているのが阿部朗一の定義である。阿部朗一は、1987年に出版された古田暁編の『異文化コミュニケーション』の中で、

「ここで文化を正式に定義すれば、ある集団のメンバーによって幾世代にもわたって獲得され、蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間、空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相

Hosei University Repository

の集大成であるといえよう。」
と述べている。

金沢吉展は1992年の『異文化とつき合うための心理学』の中で、

「文化とは、人間の相互関係によって生み出され、一つの世代から次の世代へと身につけられて伝えられていく知識、技能、態度であり、その場所や集団に特有のパターンです。こうした伝達は、主としてシンボルによって行われ、そこでは、さまざまな事象に対して、ある特有の意味づけがされています。このパターンがその集団の成員により共有され、集団の中で人から人に教えられていく場合、それを文化と呼びます。」
と書いており、また、

「こうした文化は、いわば空気のようなもので、その文化を有する人びとは自分の文化によって自分の心理社会的発達、思考、感情、態度、価値、意図、といった重要なことが大きく左右されていることには気がつきません。文化という眼鏡を通して自分自身や他人に対する見方が規定されているのですが、誰もそれには気がつかないのです。」
と書いている。③

鈴木孝夫は、1973年の『ことばと文化』の中で、

「文化ということばには、いろいろな意味や使い方がある。」
と指摘したあとで、

「一般の人々はこのことばを、何等かの意味で文学、音楽、絵画といった人間の芸術活動に結びつけて理解することが多いようだ。また文化国家、文化人、文化的な生活のような表現から、何か香り高い格調のあるものとして文化を考える人も少なくないと思う。」
と、「文化」の一般的な意味（つまりエスノセントリックな意味）を提示し、さらに、

「しかし私が文化と称するものは、ある人間集団に特有の、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝承されていく、行動及び思考様式上の固有の型（構図）のことである。文化をこのようなものとして把えることは、今や言語学や人類学の領域では常識となっている。（中略）つまり文化とは、人間の行動を支配する諸原理の中から本能的で生得的なものを除いた残りの、伝承性の強い社会的強制（慣習）の部分をさす概念だと考えて頂いてよい。」

Hosei University Repository

と述べ、一般的ではないと言うか、言語学や人類学での（あるいは心理学や社会学もこれに含ませてよいと考えるが）文化の概念を提示している。

この区別は非常に重要だと考えられる。

西江雅之は、1980年の吉行淳之介との対談『サルの檻、ヒトの檻』の中で、

「つまり、生きている人間から純粋に生理学的な次元で語れるものを除いたすべて、を文化と呼ぶ。すなわち、身体の物質的基盤と、物を食べたら胃袋が動くというような面での身体の活動などは除くわけです。もっとも、生理学的な次元で語れるものはすべて文化ではないのかというと、そうともいえないわけで、ここらへんは微妙なんですが。たとえば手が二本、足が二本、目が二つ、鼻が一つ、口が一つといったようなことは文化ではないし、人間が生きている、成長するということ自体も文化ではない。しかし、人間が生きるとか成長するということは、それぞれの時代や環境や人間関係や食糧事情のなかで、“どのようにか”生きている、“どのようにか”成長しているといえるでしょう。そういうふうに見たとき、その“どのようにか”は文化です。そして、その“どのようにか”はその個人が生まれてから自力で開発したものではなくて、一歩先に生まれた者からのものをひきずっているということになる。（中略）そういう背景も文化です。」

と述べ、さらに吉行淳之介の「その“どのようにか”生きているというのは、個人個人の例ですか。」という質問に答えて、

「もちろん“どのようにか”生きているのは個人です。しかし人類学が研究しようとしているのは、特定の一個人ではないんです。そうではなくて、ある場所で個人個人が“どのようにか”生きているということそのものの背景にはどこか集団的に一致した面が見られる。それが「ある文化」である、ということなんですね。それは個々の人間が各々“どのようにか”生きているとき、何らかの共通基盤となっているものだと言えますか。」

と答えている。また別のところでは、

「文化とは逃れられない檻ですよ。」

という答え方をしている。

さらに、1989年の『ことばを追って』では、

「“文化”という語は、世間では実に様々な意味を込めて用いられている。そして、その一つ一つの用法は、それが実際の生活の中で成り立っている

Hosei University Repository

かぎり、それなりの正当性を持つものである。

ある者はエスセントリズム（自己集団中心主義）を丸出しにして、特定の人間集団の生活のあり方の優劣を“文化”という語で語り、ある者はある場所に見られる物自体についての価値を“文化”という語で語り、ある者はある場所に見られる人々のあり方を、規模の大小や単純とか複雑とかいうことを基準にせずに“文化”という語で語っている。

このような広がりから起こる混乱を避けるために、ここでの“文化”という語について一言、触れておくことが必要なことと思われる。

ここでいう“文化”とは、一言で表現すれば、「ある人間集団の生き方そのもの」を指している。しかし、「人間の生き方そのもの」というだけではとりとめがないので、少し内容を説明すると、“文化”とは、「ある時代のある土地に生きる人間集団を見たときに得られる、外から観察可能なその人々の行動のあり方と、外からは観察不可能な行動（考え方など）のあり方の両方が持つ強い傾向なり規則性を言う。また、その人々の生き方は個々の人が生まれた時には既に待ち受けているものであり、人々は成長の過程でそれを身に付けていく。すなわち人は周囲の者たちと同じ傾向を持った生き方をする成人へとなっていくわけである。しかし、それでも個々の人の生き方は千差万別であるとも言える。ある者はその土地の人々から見たら共通した生き方の中心部で生活し、ある者は多くの人々とはやや異なった生き方を周辺部でしているからである。しかし、いずれの地点に生きようとも、人々の生き方は、その保守性がゆえに、またはその変革志向の強さのゆえに、また他の生き方をする人々との接触がゆえに、または個人的な欲求がゆえに、時間の流れの中で刻々と変化を遂げていくものである…」と言うことも出来るだろう。」

と書き、優劣等の価値観に結びついたエスセントリックな「文化論」と、「“どのようにか”生きている」という「文化論」との区別をはっきり指摘し、その上で「“どのようにか”生きている」という「文化論」の内容についてかなり踏み込んだ解説をしている。

以上にあげてみたように、様々な人々による、様々な「文化」についての言説をただ羅列しているだけでは「文化」の定義にはならないのではあろうが、ことほど左様に「文化の定義」には、それ自体が困難さを伴うく

Hosei University Repository

わだてであるということは示すことができたのではないかと思う。そして、その上で、我々は、優劣をあげつらう文化論ではなく、違いを認めあおうという文化論の立場に立って、異文化との関係を考えなければならないのではないかという示唆も得られたように思う。

ただ、優劣をあげつらう「文化論」を「絶対的」、「"どのようにか" 生きている」という「文化論」を「相対的」ということができるが、我々個人が自分自身の人生について考えるときに「相対的」な思考は有益であろうが、いざ自分の生き方を選択するという段階では「絶対的」に生きるしかないわけで、世の中を見る態度としての「文化」の話と、そういう「相対的な」文化を認めたうえで、今度は自分自身の問題として、私はこう生きたいというときに関わってくる「文化」の話とは、実はずれているのだということを最後に指摘しておきたい。

注

① この標題は、エリオット（1948）の著書の標題を借りた。

② 「文化」という単語の歴史については、ここでは生松敬三（1971）をあげておくので、参照されたい。

③ この「文化によってものの見方が規定されている」という発想は、いわゆる「サピア＝ウォーフの仮説」と呼ばれるものであるが、これについては別に稿を改めて論じたい。

文 献

ボック（1974）『現代文化人類学入門』（江淵一公訳（1977）講談社学術文庫）

エリオット（1948）『文化とは何か』（深瀬基寛訳（1967）清水弘文堂、ただし訳者の「訳後に」の日付は1951年になっている）

古田暁編（1987）『異文化コミュニケーション』有斐閣

蒲生正男・祖父江孝男編（1969）『文化人類学』有斐閣

ホール（1959）『沈黙のことば』（國弘正雄・長井善見・斎藤美津子訳（1966）南雲堂）

ホール（1966）『かくれた次元』（日高敏隆・佐藤信行訳（1970）みすず書

Hosei University Repository

房）
ホール（1976）『文化を超えて』（岩田慶治・谷泰訳（1979）ティービーエス・ブリタニカ）
ホール（1983）『文化としての時間』（宇波彰訳（1983）ティービーエス・ブリタニカ）
生松敬三（1971）「「文化」の概念の哲学史」『岩波講座　哲学13文化』pp.73-101岩波書店
井筒俊彦（1985）『意味の深みへ』岩波書店
古藤友子（2001）「異文化を考える」飛田良文編『異文化接触論』pp.73-116おうふう
クラックホーン（1949）『文化人類学の世界』（外山滋比古・金丸由雄訳（1971）講談社現代新書）
Kroeber,A.L. & C.Kluckhohn（1952）『Culture : a critical review of concepts and definitions』Vintage Books, A Division of Random House
鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
西江雅之（1989）『ことばを追って』大修館書店
西江雅之・吉行淳之介（1980）『サルの檻、ヒトの檻』朝日出版社
プロッサー（1978）『異文化とコミュニケーション』（阿部朗一訳（1982）東海大学出版会）
サモーバー,L.A.・R.E.ポーター・N.C.ジェイン（1981）『異文化間コミュニケーション入門』（西田司訳（1983）聖文社）